

ジェンダー・パースペクティブ試論

——パトナムの内在的実在論とラウダンの網状モデルを手がかりにして——

根村 直美

The primary purpose of this paper is to interpret gender perspective, which is based on “social constructionism,” mainly using Putnam’s internal realism and to explain the categories of “sex,” “women” and “men” from the perspective. According to the perspective, we cut up the world into “objects” within some scheme of description, and if inductions using existing categories regularly lead to false conclusions, such failures make us think those categories are wrong and that others should be employed instead.

This paper tries to distinguish such gender perspective from relativism. That is to say, the secondary purpose of this paper is to show that, by introducing Laudan’s reticulated model into the gender perspective, we can secure the possibility to form consensus in factual beliefs, methodologies, and cognitive aims through rational arguments in scientific debates. In other words, we can make rational judgments to verify and correct factual claims about “man and woman.” We can decide rationally to employ the new methods instead of the traditional methods. For example, we can make factual beliefs based on women’s experiences, not based on the observations of men. Furthermore, we can resolve disagreement about cognitive values through rational discussion.

キーワード：社会的構築、パトナムの内的実在論、形而上学的実在論、文化相対主義、ラウダンの網状モデル

はじめに

ジェンダーとは、＜社会的構築（Social Construction）＞を根幹に置いた概念である（舘 1998；ハッキング 1999＝2006）。＜社会的構築＞を根幹に置いたこの概念の力点がどこにあると捉えるかは一様ではないであろうが、本稿では、「性別や性差、性的欲望・性的行動など性に関わる事柄についての知は社会的・文化的に構築されている」という認識を示すジェンダー概念を主として射程とする。

だが、仮にこうしたジェンダー概念を議論の前提とすることが受け入れられたとしても、＜社会的構築＞というのが何を意味しているのかを説明するのは容易ではない。その容易ならざることを現代哲学の議論を用いて試みるのが本稿の第一の目的である。具体的には、＜社会的構築＞を中核に置くジェンダー概念によってたつパースペクティブ、以下、本稿では、それをジェンダー・パースペクティブと呼ぶことにするが、そのジェンダー・パースペクティブを現代の分析哲学¹の議論を取り入れつつ読み解いていくことを第一の目的とする。

また、そのジェンダー・パースペクティブに基づく〈科学〉の〈知〉の分析に、現代の科学哲学（本稿では、分析哲学と科学哲学を区別し、広く〈知の理論〉を射程に置くときには〈分析哲学〉という語を用い、〈科学の知〉についての哲学に限定する場合には〈科学哲学〉という語を用いる）の議論を取り入れることを第二の目的とする。

分析哲学、あるいは、科学哲学の立場から〈社会的構築〉に関する論争を分析したイアン・ハッキング（Ian Hacking）によれば、科学哲学の領域においては（筆者の見るところ、分析哲学の文脈においても）、そもそも〈社会的構築〉の問題について語り合おうとしないか、決定的な対立をへて話し合いの余地なし、の状態にある（ハッキング 1999=2006）。筆者が今回このテーマに取り組んだのは、そうした状況を打破しようとするハッキングのような試みの更なる蓄積は、ジェンダー研究、そして、分析哲学、あるいは、科学哲学の双方にとって生産的な議論を生み出していくと考えたからである。

1. パトナムの内在的實在論から読み解く〈社会的構築〉²

1-1 〈社会的構築〉をめぐる

さて、筆者は、〈社会的構築〉を根幹において世界を見る見方は、ヒラリー・パトナム（Hilary Putnam）の〈内在的實在論〉³を用いて説明することができるのではないかと考えている。パトナムは、「世界はいかなる対象からなるか」という問題は、理論や記述の内側で問うてのみ意味を持つような問いであるとする（パトナム 1981=1994、p.78）。つまり、人が認識する〈対象〉は、どのような概念図式を人が使用するかに依存し、その概念図式を使用する人によって同定される以前は、〈対象〉が存在するのではない、と考えるのである。そして、パトナムの内在主義の観点では、「真理」とは、「談話から独立した『事態』との対応ではない」（パトナム 1981=1994、p.79）。パトナムによれば、「われわれが知りうるような、あるいは実際に利用しうるものとして想像することができるような、〈神の眼のごとき観点〉は存在しない。現実の人々が持つさまざまな観点のみが存在するのであり、しかもそれらは、彼らの記述や理論がそれに仕えるさまざまな関心や目的を反映する観点なのである」（パトナム 1981=1994、p.79）。

パトナムが上述のような見地を取るのには、形而上学的實在論を斥けざるを得ないからである。パトナムによれば、「形而上学的實在論」とは、「『世界の在り方』についての真で完全な記述がただ一つ存在する。真理は、語または思惟記号と外的な事物や事物の集合との間のある種の対応関係を含んでいる」とする見地である（パトナム 1981=1994、p.78）。「形而上学的實在論」を斥けざるを得ないことを論証するパトナムの議論の概略は、以下の通りである。まず、パトナムは、例えば、 C_1 と C_2 とを記号と対象の集合との間の二つの許容可能な「対応」とであるとする（パトナム 1983=1992、pp.5-6）。さて、神は次のことをした。即ち、男がある語を用いるときに、その語は対応 C_1 のもとでの単一あるいは複数の真理値を指すが、女がある語を用いるときには、その語は対応 C_2 のもとでの単一あるいは複数の真理値を指すようにしたのである。神による指示の指定のどちらにおいても、全く同じ文が真となる。この場合、同一の対象や関係を指示していないことには全く気づかないまま、男と女が話をすることができるのである。このとき、語と対象との間に、ただ一つだけ正しい対応があると信じるには、あらかじめ事物に指示的に到達していなくてはならない（パトナム 1981=1994、p.112）。しかしながら、われわれは、「神の眼からの観点」なしに取り残されているのである（パトナム 1981=1994、p.114）。

かくして、パトナムは「事実的なもの」と「規約的なもの」との二分法を否定する。パトナムによれば、問題はこうである（パトナム 1983=1992、p.211）。知識が人間の心によってのみ作られたものすぎないということは提唱したくはない。それは、あらゆる観念論を超えた観念論である。それゆえ、われわれの知識には「事実的要素」があると言う。他方、知識とは心と独立にある実在の単なる「模写」であるとか、「唯一正しい理論」への近似だといった提唱をしたいとも思わないし、また少なくともそうすべきではない。それゆえ、知識には「規約的要素」があると言うのである。しかし、このような要素について語っていると、われわれは身動きが取れなくなってしまう。というのも、二つの要素について述べていると、少なくとも原理的には、われわれの知識をその二つの要素に分解し、どの部分が事実的であって、どの部分が規約的であるかを言い当てることができるのではないかと思われかねないからである。しかしまさにこれは、「世界それ自体」があるという考えを再び持ち出すことになるだろう。というのも、すべての「規約的要素」を取り除いた「事実的要素」を述べることができるということになると、結局それは「世界それ自体」ということになるであろうからである。

また、パトナムは「事実」と「価値」の二分法も否定する。パトナムによれば、「いかなる事実も価値付加的であり、かつわれわれの価値のいずれも何らかの事実に加付を与える」のである（パトナム 1981=1994、pp.193-227、p.297）。

ところで、先の引用にあるように、パトナムは、＜世界のあり方＞の＜記述＞は現実の人々の「関心」を反映していると論じる（パトナム 1981=1994、p.79）。また、パトナムの「内的実在論」に大きな影響を与えたと考えられるネルソン・グッドマン（Nelson Goodman）とキャサリン・Z・エルギン（Catherine Z. Elgin）は、「関心」の他に、「実際行動」（実践）という語を用いている（グッドマン／エルギン 1988=2001、p.234）。確かに、現実の人々の「関心」や「実際行動」もまた、現行の知を通して生みだされていくのであるから、その知の只中にあることにならざるを得ないであろう。しかし、パトナムは、われわれは自分の頭を使いそれまで習得してきた説明を受け入れないことができると論じる（パトナム 1983=1992、p.17）。そして、グッドマンとエルギンは、自分たちの理論は知の「再構築」に重きを置くと言う（グッドマン／エルギン 1988=2001、p.3）。これまで論じてきたような立場にたつとき、現実の人々の＜関心＞や＜実際行動＞はまた、現行の知を＜再構築＞しうと考えることになるのである。

1-2 ＜セックス＞というカテゴリーと＜女性＞＜男性＞というカテゴリー

前項のような議論に基づくとき、＜セックス＞というカテゴリーおよび＜女性＞＜男性＞というカテゴリーはどのように取り扱われることになるであろうか。

先にも触れたグッドマンとエルギンによれば（グッドマン／エルギン 1988=2001、pp.21-28）、時にはある種のカテゴリーを用いた帰納が、真なる前提から偽なる結論へと至ることがある。そうした挙句にこの種の失敗が、それまで用いてきたカテゴリーが間違いで別のカテゴリーを使用すべきではないか、と考える理由となる。こうして、例えばニュートン物理学による予測の失敗の歴史が、相対論的カテゴリーが古典物理学的カテゴリーにとって代わるためのお膳立てをしたのである。新奇なカテゴリーが成功しているシステムに組み込まれたり、あるいは巧くいってないシステムにとって代わることもあるのである。

さて、＜セックス（生物学的な性別）＞と＜ジェンダー（社会的文化的性別）＞というカテゴリーに

即して言えば、上述のような議論に基づくパースペクティブは、必ずしも、＜セックス（生物学的な性別）＞というカテゴリーを拒否したり否定したりするものではない。しかしながら、それは、＜セックス＞というカテゴリーのもとで産出される知が、物質的次元の＜實在＞を言い当てていると考えることを拒否し否定する見地である。言い換えれば、そのパースペクティブは、＜セックス＞を＜事実的要素＞とし、＜ジェンダー＞を＜規約的要素＞とするような二分法を否定するものである。というのも、＜セックス＞というカテゴリーを、＜社会・文化的なもの＞としての＜ジェンダー＞というカテゴリーと対置することは、パトナムの言うように、われわれの知のどの部分が＜事実的＞であって、どの部分が＜規約的＞であるかを言い当てることができるのではないかという考えを呼び込みかねない。しかし、これはまさに、＜世界それ自体＞があるという考えを再び持ち出すことに他ならないのである。そこで、このパースペクティブは、＜セックス＞というカテゴリーを＜社会・文化的なもの＞としての＜ジェンダー＞というカテゴリーと対置することにより、かえって＜セックス＞というカテゴリーが＜基盤＞となり形而上学的に＜實在化＞されることを拒否し否定するのである。また、その見地は、＜セックス＞というカテゴリーそのものが、真なる前提から偽なる結論へと至り、新たなカテゴリーに取って代わられることを受け入れるものなのである。

上述のような議論に基づくパースペクティブは、＜セックス＞というカテゴリーを持たない記号体系を唯一正しい知として提唱するものではない。ある記号体系のみが＜真理＞に対応しうると主張することはできないのである。しかしながら、上述のように、この見地は、真なる前提が偽なる結論に至るといふことの積み重ねにより、用いてきたカテゴリーとは別のカテゴリーを使用すべきではないかと考えるに至ることを排除するわけではない。既存のカテゴリーを拒否したり否定したりしないことは、そのカテゴリーの革新を排除するわけではないのである。あるカテゴリーが用いられていることを尊重するあまり、新たなカテゴリーの使用を妨げてはならないのである。

同様に、そのパースペクティブは、＜女性＞＜男性＞というカテゴリーを否定し拒否するものではない。拒否し否定したいのは、＜女性＞＜男性＞というカテゴリーが、固定的な指示内容を持ち、その固定化された指示が硬直化した規範として働くことである。＜社会的構築＞を中核に置くということは、ジュディス・バトラー（Judith Butler）の言うように、＜女性＞＜男性＞というカテゴリーを開かれたものとして用いることを意味する（バトラー 1992=2000）。それは、＜女性＞＜男性＞というカテゴリーそのものを拒否したり否定するのではなく、＜女性＞＜男性＞というカテゴリーを開かれたものとして用いることで、固定的な指示対象を持つ硬直化した規範としての＜女性＞＜男性＞というカテゴリーを否定し拒否しようとする立場である。その見地からすれば、＜女性＞＜男性＞というカテゴリーについても、そのカテゴリーを持たない記号体系を唯一正しい知として提唱しうると考えることはできない。それは、ある記号体系のみが＜真理＞に対応しうると主張することに他ならないからである。先にも述べたように、そのパースペクティブは、既存の知の枠組みを拒否したり否定したりするのではなく、その知の＜再構築＞に焦点を当てるものである。そして、それはまた、カテゴリーの可変性を受け入れる立場なのである。

ところで、その知を＜再構築＞するのは、あくまで現実の人々の＜関心＞や＜実際行動＞である。それは、＜事実＞と＜規約＞の二分法および＜事実＞と＜価値＞の二分法を否定するものであり、知を個人にとっての＜関心＞＜実際行動＞により適うものとすることを目指すような見地である。そのような見地は、個別の学問領域が＜女性＞＜男性＞の経験をもとに知を産出し直し＜再構築＞することを

可能にする。言い換えれば、＜セックス＞あるいは＜女性＞＜男性＞というカテゴリーを上述のように捉えることにより、現実の人々の＜関心＞や＜实际行动＞に適合するように種々の知を＜再構築＞する可能性が切り開かれるのである。

最後に述べておかなければならないのは、＜社会的構築＞を中核に置くということは、＜身体＞の物質性の否定を意味するわけではないということである。＜身体＞が＜言説＞にしかすぎないと言っているわけでない。それは、＜身体＞の物質的次元の理解もまた、＜言説＞、つまり、＜言語的に媒介された相互行為を通じて形成される知＞たらざるを得ないとする見地にたつことである。言い換えれば、＜身体＞に関する知もまた、われわれの言説システムを離れて成立しえないとする立場にたつことである。また、それは、＜形而上学的実在＞についての見地ではない一方で、イマヌエル・カント（Immanuel Kant）のように、＜認識＞に関し、知の構築過程に対するア・プリオリな制約を明らかにしうる（パトナム 1983=1992、p.260）とは考えない立場である。その意味では、伝統的な＜存在論＞でも＜認識論＞でもない。のみならず、その見地は、＜存在論／認識論＞という二分法を踏襲しない立場とも言えよう（ハラウェイ／グッドイブ 2000=2007、p.102）。

2. 形而上学的実在論と文化相対主義の狭間で

2-1 形而上学的実在論と文化相対主義の間の細い道

先述のような議論に基づき、パトナムは、記号と対象もしくは対象の集まりとの間にただ一つの確定した対応があることをわれわれが知りうるという考えを斥けた。しかし、一方で、自らの内的実在論を文化相対主義とも区別する。真理を同じ文化に属する仲間同士の尺度に基づくものとするなら、真理の探究はただ同じ文化に属する仲間を納得させることだけになる（パトナム 1983=1992、p.300）。真理を相対主義的な正当化と同一視するなら、現在は正当なものと思われている言明のいくつかは、今後真ではないことになるかもしれない、という考えを放棄することになってしまうが、パトナムはそうした考えを放棄することをよしとはしないのである（パトナム 1983=1992、p.155）。パトナムによれば、われわれの諸概念が、概念化による汚染を完全に免れている何かに「適合する」かどうかを問うことが有意味だということを拒否することと、だから、あらゆる概念体系が他のどの体系とも同等によいのだ、と主張することとは別のことなのである（パトナム 1981=1994、p.85）。

かくして、パトナムは、形而上学的実在論という一方の極から離れるに際して、文化相対主義の主張に陥らないことを自らの課題とし、真理を、「理想化された正当化」（パトナム 1983=1992、pp.16-19）、即ち、＜理想的条件下での保証された主張可能性＞として扱うことになる。「理想化された正当化」あるいは＜理想的条件下での保証された主張可能性＞としての「真理」は、われわれ自身がそうであるのと同様に、曖昧で、関心に相対的であり、コンテキストによって変化する。したがって、現在われわれが正当化されていると認めている言明が後には偽であると思出すことがありうるが、さらに、現在われわれが正当化になっていると思なしている手続きが実はそうではなく、正当化のための別の手続きがよりよいものであるということを見出すことになるかもしれない（パトナム 1983=1992、p.156）。言い換えれば、＜世界のあり方＞の＜記述＞、世界に関する知は、知に関わる人々の＜関心＞や＜实际行动＞を通じて、絶えず個々の言明の＜正当性＞が問われ、また、＜正当化条件＞の基準そのものが問われるものと見なされるのである。

パトナムの内在的實在論とは、「真理」を固定したものと見なすことを拒否し、主張の内容のみならず正当化条件も含めて、変化しうるものであるとする立場である。内在的實在論とは、「形而上学という泥沼と、文化相対主義と歴史主義という流砂の間の細い抜け道」を見出そうとする試み（パトナム 1983=1992、p.285）に他ならない。パトナムは、多くの場合判断に対して良好であったり不良であったりする条件が存在しうること、そうした条件が十分に良好である場合には、答がどうなるかは「事実問題」であること、そして、われわれが「合理的」であるならば、意見が「収束」するような答が存在すること、それが自身の「内在的實在論」の核心と論じる（パトナム 1983=1992、p.18）。即ち、パトナムは、＜よりよい正当化の方法＞に基づいた＜合理的な議論＞を通じて生じる意見の＜収束＞、そこにこそ形而上学と文化相対主義の間の細い道を見出したのである⁴。

2-2 「世界のよりよい記述」としての科学に向けて

筆者は、上述のパトナムの議論が示唆する想定、即ち、＜よりよい正当化の方法＞に基づいて＜合理的な議論＞を行うのならば、意見の＜収束＞が生じうる、という想定をジェンダー・パースペクティブに取り入れることが必要なのではないかと考えている。というのも、「我々は、医療や健康、栄養、環境、社会政策など日々の生活で直面する多くの決定を、合理的に正当化できる根拠を必要としている。我々は、口論の際に、自分の側についている人だけでなく、自分に賛同しない人を納得させる必要がある」（ハーディング 2006=2009、p.230）からである。言い換えれば、従来の男性／女性の非対称性に関する主張を覆すような知が異なる立場にいる人に受け入れられる可能性を確保するには、そのような意見の＜収束＞がありうると想定する必要があるのではなからうか。

そうした意見の＜収束＞は、ハラウエイの言うところの「世界のよりよい記述」としての科学（ハラウエイ 1991=2000、pp.349-387）に欠くべからざる要素であろう。ハラウエイは、問題は、「いかにして、あらゆる知の主張や、知ろうとしている対象／抜け目のない主体のラディカルな歴史的偶発性について記述する作業（中略）を行うと同時に、『リアルな』世界について誠実に説明する作業(中略)にもまじめに関わっていくのかということである」と論じる。ハラウエイによれば、科学の知はつねに「状況に置かれた知」であり、人間の行為主体性や責任を免れるものではなく、説明義務や責任を負ったものとして認識されるべきである。しかし、一方で、『知の体系』やものの見方を変容させることへの希求を優先するような、教義としての客観性、実践としての客観性を擁護」する。ハラウエイの「世界のよりよい記述」としての科学には、その知は文化・社会的関心と切り離すことができないという洞察と同時に、「多元主義ではない『対話』」であるところの「客観性」によってたつ知を紡ぐ作業、「信頼に足る知を紡ぎ出すプロジェクト」は欠くことができない要素なのである。

また、認知能力、攻撃性の性差、月経・閉経の研究を分析し、それらの研究における調査とモデル構成の不適切さを指摘するアン・ファウスト-スターリング（Anne Fausto-Sterling）の研究を通じて、研究者たちに「日常文化というプリズム」（ファウスト-スターリング 1985=1990、p.21）を意識させうるには、あるいは、われわれが自身のプリズムを意識することができるのは、＜よりよい正当化の方法＞に基づいた＜合理的な議論＞の土俵においてのことであろう。

ファウスト-スターリングは、「よい科学」を提案しようとしたランディ・ケスケ（Randi Koeske）の議論を取り上げる（ファウスト-スターリング 1985=1990、pp.312-320）。ケスケによれば、「科学」するとは、自分なりの現実を作り、その中へ直接的・間接的に観察できるいろいろなものごとを詰め込む

ことである。ケスケは、真理を確認するプロセスは特定の見通しの中でのみ可能であり、「ほんもの」の方法というものは存在しないと主張する。だが一方で、閉経の調査・研究に対して、女性が自分で語る経験をまじめに取り上げようというアドバイスをする。ケスケは閉経記録のほとんどが、治療にきた女性を診察した男性医師が書いたことに気づき、研究者たちは、女性からのレポートを閉経を理解する正当な洞察を与える有効なデータとして使うことを学習しなければならないと唱えているのである。ファウスト-スターリングは、「よい科学／悪い科学」という分析では不十分として「フェミニストの科学」を注視する立場を取るが、ケスケの分析と示唆を「科学の進歩」という名に値するとする。また、長い間には「よい科学」が「悪い科学」をしのぐとも言う。ファウスト-スターリングが不十分とするのは、「よい科学／悪い科学」という分析には、「よい科学」が近代西洋フェミニズムという多岐に渡る政治・文化運動により可能になったという認識やその普及には政治・社会的運動を必要とするという洞察が欠けている点である。つまり、「よい科学」そのものを否定しているわけではないのである。

いずれにせよ、ハラウエイおよびファウスト-スターリングの全体化指向を否定しつつ、安易な相対主義を否定する科学論には、パトナムの＜内的实在論＞と同様の構造を見て取ることができるのではなかろうか。そう考えるとすれば、＜よりよい正当化の方法＞に基づく＜合理的な議論＞を通じて、意見の＜収束＞が生じる道筋を明らかにすることは、ジェンダー・パースペクティブによってたつ場合にも重要な課題と言えるであろう。

3. ラウダンの網状モデル

上述のような課題が明らかになったところで取り上げたいのは、实在論を批判しつつも、＜科学＞において見られる意見の一致に注目した科学哲学者ラリー・ラウダン（Larry Laudan）の議論である。ラウダンにとって、注目すべきなのは、科学者たちの見解はしばしば対立し不一致に陥る一方で、その不一致が解消され広い範囲において合意が形成されることであった。そして、ラウダンは、科学哲学が、その不一致と合意のどちらか一方にしか焦点を当ててこなかったことを批判し、両方を説明するモデルを提示する。そのモデルの提示は、パトナムが十分に論じなかった道筋、即ち、＜よりよい正当化の方法＞に基づく＜合理的な議論＞により意見の＜収束＞が生じる道筋を描き出すことを通して、＜形而上学的实在論＞でも＜文化相対主義＞でもない＜第三の道＞をより明るく照らし出そうとする試みと位置づけられるものであり、非常に示唆に富むものとなっている。

なお、本稿では、ラウダンの『科学と価値』（ラウダン 1984=2009）において行われている議論を取り上げるが、そこでの＜価値＞とは、あくまで認知的価値のことである。その著作でのラウダンの議論は、＜認知的目標＞を主題とする。ラウダンは、「倫理的価値は、科学の意思決定に常に介在」しているという認識を示しているが、「倫理的価値」について語る著作ではないと明言するのである（ラウダン 1984=2009, pp.i-x）。したがって、本稿では、認知的な価値問題の範囲においてラウダンの議論を参考とすることになる。

3-1 階層モデルから網状モデルへ

ラウダンは、科学における不一致と合意の両方を説明することが求められるにもかかわらず、これまでではその両方ともを扱うことができなかったのは、科学哲学が、「正当化についての階層モデル」を前

提にしているからであるとして、次のように論じる（ラウダン 1984=2009、pp.33-38）。

「正当化についての階層モデル」の支持者は三つの互いに関連するレベルを想定する。階層の最も低いレベルに属するのは、「事実」に関する論争である。ここでの「事実」とは、直接に観察可能な出来事に関する主張のみならず、理論的、あるいは、観察不可能な存在者についての主張も含まれている。このレベルにおける論争は、「事実に関する不一致」であり、このレベルでの一致は「事実に関する同意」であるが、階層モデルによれば、科学者たちが事実に関する不一致を解消しそれによって事実に関する同意を作り上げるのは、一つ階層を上って「方法論」のレベルへと移動することによってである。「方法論」のレベルの規則には、非常に一般的なもの（「テスト可能でかつ単純な仮説を定式化せよ」）から、中間的な一般性を持つもの、そして、ある特定の学問分野さらには下位分野に特有のものに至るまでさまざまであるが、その方法論的な規則は事実に関する論争を調停することができるのである。

しかしながら、科学者たちは、時として、証拠や手続きについての適切な規則に関して、あるいは、それらの規則を問題となっている事例に当てはめる仕方に関して、意見を異にする場合がある。そのような状況においては、もはや方法論的な規則は事実に関する不一致を解決するための優良な道具とは見なせない。標準的な階層説では、そのような方法論的論争が解決されるのは、さらに階層を上ることによってである。つまり、共有されている科学の認知的目標、即ち、認知的価値に言及することによってである。というのも、現に自分たちが採用している手続きや評価に関する規則は、われわれの認知的な目標を実現するための最善の手法と見なされているからである。二人の科学者が自分たちが異なった方法論的規則を採用していることに気づくときは、彼らは、敵対する規則のうちどれが最も効果的に科学の認知的目標の達成に貢献するかを決定することによって、方法論的レベルの論争を終結させることができる。事実についての不一致は方法論的レベルで解決されるのに対して、方法論上の意見の相違は価値論的レベルにおいて取り除かれるというのが、伝統的な哲学的見解である「正当化についての階層モデル」である。

この古典的な階層モデルにおいては、目標は最上位に位置する。したがって、科学においては、一連の認知的目標が内的に整合しているとするならば、それらを合理的に評価したり他の目標と合理的な方法で比較する術はない。その結果、科学における目標の変化は、「趣味や流行の歴史の一部」なのであって、「人間の思考の道理に基づいた合理的な歴史の一部ではない」（ラウダン 1984=2009、p.75）と位置づけられてしまう。ラウダンは、これまでの科学哲学が行き着いてしまうこの帰結を避けるべく、伝統的なモデルに代わるモデルを提示しようと試みるのである。

さて、ラウダンは、階層モデルに代わるモデルを提示するに先立って、階層モデルに基づく混乱について指摘する。それは、次のような「共変性の誤謬」と呼ばれるものである（ラウダン 1984=2009、pp.64-66）。その誤謬の一つの形は、事実に関する不一致は最終的には目標レベルでの相違が存在していることを示唆する、とする想定を含んでいる。パラダイム転換というトーマス・クーン（Thomas Kuhn）のよく知られた概念はこの点を見事に例証している。どのパラダイムも、それ自身の形而上学と、それ自身の一組の認知的基準ないし目標を持つのであるから、二人の学者が異なる存在論、それゆえ、異なるパラダイムを支持する場合には、彼らはまた異なる認知的目標を支持しているに違いないということが帰結する。反対に二人の科学者がパラダイムを共有するのは、彼らが同じ存在論と同じ価値論に従っている場合なのである。

ラウダンの見解では、要するに科学に関するラディカルな相対主義は、(a) 異なる科学者は異なる目

標を持つこと、(b)異なる目標の適切性に関してなしうる合理的な審議は存在しないこと、(c)目標、方法、事実に関する主張は常に共变的な群れをなして現れることを受け入れることから帰結する(ラウダン 1984=2009, p.75)。ラウダンの分析によれば、事実や方法論に関する一致・不一致は目標に関する一致・不一致と連動しており、この三つは一度に変化するという考え方が相対主義をもたらしめているのである。

かくして、相対主義ではない立場を模索するラウダンは、階層モデルに変更を加え、「網状モデル」、あるいは、「三項ネットワーク」と名づける、次のようなモデルを提示する(ラウダン 1984=2009, pp.94-100)。「網状モデル」が、一方的な正当化のはしごを要請する階層モデルと根本的に異なる点は、相互調整、相互正当化の込み入った過程が三つのレベルのすべての間で進行する、と強調する点にある。正当化は、階層の中で下向きになされるのと同じだけ上向きにもなされ、目標、方法、事実に関する主張を結び付けている。もはやわれわれは、これらのレベルのどれか一つが特権的であるとか、第一義的であるとか、あるいは他のレベルと比べてより根本的であると考えべきではない。価値論、方法論、事実に関する主張は、避けがたく互いに織り合わされて相互依存関係にある。階層アプローチが暗に含んでいた序列はこれらさまざまなレベル間の相互依存パターンを強調するような、ある種の水平化の原理に道を譲らなければならないのである。

ラウダンは、いったん網状モデルが許容する変容について考え始めると、あるパラダイムから別のパラダイムへの移行が、段階を踏んだ過程であり、クーンの分析によって要求されるような、すべてのレベルでの大掛かりな移り変わりを要求しないものでありうるということがわかるとして、次のように言う(ラウダン 1984=2009, p.121)。例えば、 C_1 の理論の支持者がまず手始めに C_2 の実質的な理論の多くを受け入れることを決心するが、他方、さしあたっては C_1 の方法論と価値論を保持し続ける、といったこともあるだろう。後の段階になって、彼らは、また別の一連の議論と証拠によって C_2 の方法論を受け入れるように導かれるが、しかしまだ、 C_1 の価値論を保持するかもしれない。そして、最後に彼らは結局 C_2 の価値を共有するようになるかもしれない。まさに、そのような移り変わりの連続がデカルト主義物理学がニュートンの自然哲学に降伏するに至った漸進的な過程において生じたのである。

ラウダンの網状モデルによれば、新しいパラダイムを受け入れる経験は、クーンのように「回心の体験」として表現する必要はなくなる(ラウダン 1984=2009, p.106)。即ち、そのモデルによれば、パラダイム転換は、突然に起こる非連続的で非合理的な変化ではなく、漸進的で連続的で合理的な判断の積み重ねによる変化として捉え直すことができるのである。

3-2 ラウダンのモデルがもたらす可能性

このようなラウダンの議論は、どのようにして、ハラウエイの言う「世界のよりよい記述」としての科学に不可欠な要素を可能にするのだろうか。その点について若干の考察を試みてみたい。

第一に、ラウダンのモデルは、科学が目標とする認知的価値に関して一致が見られない状況においても、事実認識というレベルにおいて＜合理的に判断する＞可能性、言い換えれば、何らかの主張を一定の手続きに従って検証する可能性を救い出している。こうした事実認識に関する主張を検証する土俵を確保することは、例えば、ファウスト-スターリングの男女の算数能力・言語能力が違うという考えにほとんど証拠がないという主張、攻撃性に関する同様の主張等(ファウスト-スターリング 1985=1990)が、それまで＜事実＞とされてきた認識を覆す可能性を確保するということである。

第二に、同様に科学が目標とする認知的価値に関して一致が見られない状況においても、方法論的規則が事実に関する主張の〈合理的な判断〉の積み重ねにより変更されていく可能性を確保する。前節で触れたように、閉経記録のほとんどが男性医師によって書かれたことに気づいたケスケは、研究者たちに、女性からのレポートを閉経を理解する正当な洞察を与える有効なデータとして使うことを学習するように求めた（ファウスト-スターリング 1985=1990、pp.316-317）。ここでは、〈何を証拠と見なすことができるのか〉という方法論上の規則に対して変更が主張されている。ラウダンの議論を用いるならば、このような方法論の変更は、必ずしも認識論的目標の変化といったものを想定しなくとも起こりうるものと考えることができる。ラウダンの議論に基づけば、男性医師による〈観察〉ではなく女性たちの〈経験〉を証拠とすることは、〈合理的な議論〉に基づいて〈事実〉に関する論争を〈収束〉させるための〈方法論〉として論争者たちに受け入れられることが可能となるのである。

かくして、ラウダンの議論を取り入れることにより、われわれは、〈よりよい世界の記述〉としての科学に向けて、事実認識、および、方法論のレベルにおいて、〈合理的な議論〉に基づいた意見の〈収束〉が生じうる道筋を思い描くことが可能になったと言えよう。われわれは、形而上学的實在論を放棄したからといって文化相対主義に陥る必要はない。科学における事実認識、および、方法論について同じ文化に属することのない人とも〈合理的に議論する〉ことは可能なのである。

しかしながら、ラウダンの議論を取り入れることの意義はそれだけにとどまらないであろう。ラウダンのモデルでは、認知的な目標、あるいは、価値という次元を明確に設定したことにより、他の営みとは区別される〈科学〉ならではの認知上の目標について〈合理的に議論する〉ことが可能となる。確かに、首尾一貫性、単純性、エレガントさなどはよく引き合いに出されるものの、認知的目標に関して完全な一致を見ることはないであろう。認知的目標が一致を見ないということは〈科学〉内部の最上の位階での不一致ということになり、どの認知的目標を選ぶにしろ、それは、〈非合理的な意思決定〉、あるいは、〈好みの問題〉とならざるを得ないように見える。もしくは、即、〈科学〉以外の外部の価値に基づく選択とならざるを得ないように見える。しかし、ラウダンの議論に基づくとき、方法論や事実に関する主張についての一定の意見の〈収束〉が認知的目標に関する〈合理的な議論〉を可能にし、認知的目標に関しても、部分的・断片的であるとしても、意見の〈収束〉の可能性が確保されるのである。

この認知的目標は、突き詰めていくと、〈真理〉というものをどう捉えるかという問題に突き当たる。例えば、形而上学的實在論者は、科学の目標は唯一正しい世界の記述としての〈真理〉を見出すことだと考える。形而上学的實在論を批判する者は、〈真理〉をそのようなものとは捉えない。この両者の立場には容易に埋まることはない溝がある。しかし、この場合にも、ラウダンのモデルに基づけば、科学者たちは、方法論、あるいは、事実のレベルで多くを共有することが可能である。のみならず、認知的目標に関しても、首尾一貫性など、一部の目標を共有することが可能となるであろう。

もちろん、科学的な知は、つねに、そして、すでに、文化的・社会的価値を負荷された知たらざるを得ず、それらの文化的・社会的価値には、認知的価値以外も含まれている。「世界のよりよい記述」としての科学を提唱するハラウェイにしても、こうした認識を〈科学〉を理解する際の中核に置いている。それゆえ、科学が、道徳的・政治的な背景に関する問いに対して開かれることを求める。科学的探求の持つ社会的・倫理的な意味が説明される必要があると考えるのである。しかしながら、そのように考えることは、必然的に〈合理的な議論〉を通じた意見の〈収束〉を放棄することを意味するわけではない。むしろ、「多元主義ではない『対話』」であるところの「客観性」によってたつ知を紡ぐ作業は、

「世界のよりよい記述」としての科学に不可欠であるというのが、ハラウエイの考えである。そして、そのような科学が可能となる道筋を具体的に明らかにしてくれるのが、ラウダンの網状モデルと言えるであろう。

おわりに

本稿においては、まず、主としてパトナムの内的实在論の議論を援用しつつ＜社会的構築＞を中核に置き世界を把握するパースペクティブを読み解くとともに、その立場から＜セックス＞というカテゴリー、＜男性＞＜女性＞というカテゴリーについて論じた。その見地は、＜セックス＞、＜男性＞＜女性＞というカテゴリーそのものが、真なる前提から偽なる結論へと至り、新たなカテゴリーに取って代わられることを受け入れるものである。

このような立場を取りながらも、本稿は、ジェンダー・パースペクティブを文化相対主義とは区別することを試みる。即ち、ジェンダー・パースペクティブにラウダンの正当化モデルを取り入れることにより、従来の男女の非対称性に関する主張を事実認識というレベルにおいて＜合理的に判断する＞可能性、つまり、それらの主張を一定の手続きに従って検証し修正していく可能性を確保しうることが示した。また、男性医師による＜観察＞ではなく女性たちの＜経験＞を証拠とするような方法論が論争者たちに受け入れられる可能性が確保されうることが論じた。さらに、認知的価値に関しても合理的議論の可能性を確保しうることを確認したのである。

ところで、本稿においては、ラウダンの議論を受け、科学の＜知＞を中心に考察を進めてきた。しかしながら、ラウダンが＜科学＞に関して提示した網状モデルは、＜科学＞以外の＜知＞、即ち、道德、文学、政治などの＜知＞の分析にも応用できるのではなかろうか。つまり、それらの表現においても、目標、方法論、そして、そうした前提における＜事実＞問題について、何らかの形で、＜合理的な議論＞に基づく意見の＜収束＞を想定することができるのではなかろうか。そして、そうした分析が可能であるとすれば、＜科学＞、とくに、＜自然科学＞を、「それ以外のあらゆる声を沈黙させる独裁者」（ガーゲン 1999=2004, p.77）の地位に置くことを防ぐような議論の地平が開かれるのではないかと思われる。ちなみに、ラウダンは、『科学と価値』においては、自らが示した目標や方法に関する分析枠組みが道德や政治の論争に適用できるかどうか考えてみたくなる誘惑を理解しつつ、慎重な姿勢を取っている。その理由は、ラウダンによれば、人は一度に一つの戦いしか戦えないからであり、それらの論争のメカニズムの分析に進む前にメタ認識論の価値論的問題が解明されなければならないからである（ラウダン 1984=2009, p.208）。しかしながら、あえて同時に、道德など＜科学＞以外の＜知＞の分析を試みることで開けてくる地平もあるのではないかと思われる。網状モデルを使った道德、文学、政治などの＜知＞の分析に関しては、今後の課題としたい。

（ねむら・なおみ／日本大学経済学部教授）

掲載決定日：2010（平成22）年12月10日

注

1. 竹尾治一郎によれば、「分析哲学」の定義として最も有名なのはマイケル・ダメット (Michael Dummett) の見解である (竹尾 1999, p.4)。ダメットは、「分析哲学は、『言語への転回』が起こったときに生まれた」(Dummett 1994, p.5) と言う。ダメットによれば、「分析哲学」は「言語の思考への優先性」(Dummett 1994, p.4) を主張するものであり、このテーゼが「言語への転回」と呼ばれたのである。
2. この節の議論は、『ジェンダーと交差する健康／身体——健康とジェンダーⅢ——』(根村 2005) の序論において展開した議論の一部に修正を加えたものである。
3. パトナムと言え、この〈内的實在論〉を思い浮かべる向きが多い (関口 2005, p.269)。パトナムは後にその立場に修正を加えているが、かつての〈転回〉と言われるような変化があるとは思われず、依然として、〈内的實在論〉の核心部分は有効と思われる。ただし、修正後の立場に関しては理解・評価が必ずしも定まっておらず、これは、あくまで筆者の判断による。
4. パトナムは、後に、真理を〈理想的条件下での保証された主張可能性〉を必然的に伴うものとして定義することを差し控える (パトナム 2002=2006)。この立場の変化こそが注3で触れた修正の中核にあると筆者は考えているが、そうした変化は、パトナムの関心が道徳的価値の問題に向かったことによると考えられる。即ち、道徳についても、科学と同様に、「客観性」を語ることができる (パトナム 2002=2006) と主張するために、その立場を取ったと見ることができる。しかしながら、パトナムは、依然として、真理が〈理想的条件下での保証された主張可能性〉を必然的に伴うことがありうることを否定しているわけではない (パトナム 2002=2006)。パトナムの立場の修正に関する詳細な検討は別の機会に行うこととしたい。

参考文献

- 関口浩喜「解説 新たなパトナム」ヒラリー・パトナム『心・身体・世界——三つの撚り綱／自然な實在論——』野本和幸監訳、法政大学出版会、2005年、pp.261-288。
- 竹尾治一郎『分析哲学入門』世界思想社、1999年。
- 館かおる「ジェンダー概念の検討」お茶の水女子大学ジェンダー研究センター『ジェンダー研究』第1号 (1998)、pp.81-95。
- 根村直美編著『ジェンダーと交差する健康／身体——健康とジェンダーⅢ——』明石書店、2005年。
- ハラウェイ、ダナ／巽孝之「サイボーグ・フェミニズムの文学」巽孝之編『サイボーグ・フェミニズム【増補版】』水声社、2001年。
- Butler, Judith. "Contingent Foundations: Feminism and the Question of 'Postmodernism'." In Judith Butler and Joan W. Scott, eds. *Feminists Theorize the Political*. New York and London: Routledge, 1992, pp.3-21. (ジュディス・バトラー「偶発的な基礎付け——フェミニズムと『ポストモダニズム』による問い——」御茶の水書房『アソシエ』中馬祥子訳、第3号 (2000) : pp.247-270)。
- Dummett, Michael. *Origins of Analytical Philosophy*, Cambridge, Massachusetts: Harvard University Press, 1994.
- Fausto-Sterling, Anne. *Myths of Gender: Biological Theories about Women and Men*. New York: Basic Books, 1985. (アン・ファウスト-スターリング『ジェンダーの神話——「性差の科学」の偏見とトリック——』池上千寿子・根岸悦子訳、工作舎、1990年)。
- Gergen, Kenneth J. *An Invitation to Social Construction*. London: Sage, 1999. (ケネス・ガーゲン『あなたへの社会構成主義』東村知子訳、ナカニシヤ出版、2004年)。
- Goodman, Nelson and Catherine Z. Elgin. *Reconceptions in Philosophy and Other Arts and Sciences*, New York and London: Routledge, 1988. (ネルソン・グッドマン／キャサリン・Z. エルギン『記号主義——哲学の新たな構想——』菅野盾樹訳、みすず書房、2001年)。
- Hacking, Ian. *The Social Construction of What?* Cambridge, Massachusetts: Harvard University Press, 1999. (イアン・ハッキング『何が社会的に構成されるのか』出口康夫・久米暁訳、岩波書店、2006年)。
- Harding, Sandra. *Science and Social Inequality: Feminist and Postcolonial Issues*. Champaign: University of Illinois Press, 2006. (サンドラ・ハーディング『科学と社会的不平等——フェミニズム、ポストコロニアリズムからの科学批判——』森永康子訳、北大路書房、2009年)。
- Haraway, Donna J. *Simians, Cyborgs, and Women: The Reinvention of Nature*. New York and London: Routledge, 1991. (ダナ・ハラウェイ『猿と女とサイボーグ——自然の再発明——』高橋さきの訳、青土社、2000年)。

- and Thyrza Nichols Goodeve. *How Like a Leaf: An Interview With Thyrza Nichols Goodeve*. New York and London: Routledge, 2000. (ダナ・ハラウエイ／シルザ・ニコルス・グッドイヴ『サイボーグ・ダイアローグズ』高橋透・北村有紀子訳、水声社、2007年)。
- Laudan, Larry. *Science and Values : The Aims of Science and Their Role in Scientific Debate*. Berkley: University of California Press, 1984. (ラリー・ラウダン『科学と価値——相対主義と実在論を論駁する——』小草泰・戸田山和久訳、勁草書房、2009年)。
- Putnam, Hilary. *Reason, Truth and History*. Cambridge: Cambridge University Press, 1981. (ヒラリー・パトナム『理性・真理・歴史——内的実在論の展開——』野本和幸・中川大・三上勝生・金子洋之訳、法政大学出版会、1994年)。
- . *Realism and Reason: Philosophical Papers, Volume3*. Cambridge: Cambridge University Press, 1983. (ヒラリー・パトナム『実在論と理性』飯田隆・金田千秋・佐藤労・関口浩喜・山下弘一訳、勁草書房、1992年)。
- . *The Threefold Cord: Mind, Body and World*. New York: Columbia University Press, 1999. (ヒラリー・パトナム『心・身体・世界——三つの撚り綱／自然な実在論——』野本和幸監訳、法政大学出版会、2005年)。
- . *The Collapse of the Fact/Value Dichotomy and Other Essays*. Cambridge, Massachusetts and London: Harvard University Press, 2002. (ヒラリー・パトナム『事実／価値二分法の崩壊』藤田晋吾／中村正利訳、法政大学出版会)。